

委員 長 報 告 書

経済建設委員会は、平成26年1月23日（木）に長野県飯田市において「中心市街地再生への取り組み」について、24日（金）に愛知県蒲郡市において「観光交流都市づくり」について、それぞれ視察研修を行いました。
以下その概要について報告します。

記

飯 田 市

| | |
|-------|------------------------|
| 市制施行 | 昭和12年4月1日 |
| 人 口 | 105,518 人 |
| 世 帯 数 | 39,160 世帯 |
| | (平成25年12月31日現在) |
| 面 積 | 658.73 km ² |

飯田市は長野県の最南端に位置し、伊那谷の中心都市である。古くから東西あるいは南北交通の要衝として繁栄し、経済的にも文化的にも独自の発展を遂げたまちである。

現在は、飯田、下伊那を圏域とする定住自立圏の中心市宣言を行い、全国に先駆けて周辺町村と定住自立圏形成協定を締結。地域医療の充実や産業の振興、公共交通システムの整備など互いに連携・協力を図っている。

中心市街地再生への取り組み

1. 中心市街地の形成と歴史

飯田の町並みは、江戸時代の初めに城下町が整備されたことに始まる。以来、近年に至るまで400年余り、飯田下伊那の経済・文化の中心として栄えてきた。

昭和22年に市街地の3分の2を消失する大火にあい、いくつかの蔵を除いて、城下町の家並みを失ってしまい、碁盤の目のような街路だけを残して焦土と化してしまった。

この大火を機に、徹底的な防火対策と近代的な都市計画を立てるべき

との機運から「飯田市火災復興都市計画事業」として、市民も私有地の2割無償提供などの協力をし、道路の拡幅、並木通りの防火帯、各地の地下貯水槽の設営などを実施した。また、城下町の特徴である裏界線を生かした避難用通路が生まれた。

防火帯として整備された幅員30mの道路の中央分離帯には、地元中学生がりんごの木を植えてりんご並木が誕生し、平成11年には中学生や市民のプランに基づき、歩車共存のコミュニティ道路に生まれ変わり、現在はシンボル道路として市民に親しまれている。

2. 中心市街地再生への取り組み

JR飯田駅から飯田城跡に至る一帯の中心市街地は、市民からは「丘の上」と呼ばれ、昔から商業や文化など情報発信の中心地として賑わいを見せる伊那谷一の魅力に富んだ繁華街として、まさに誇れる存在であった。周辺町村に住む人々も、祭りや行事、娯楽や買い物などで飯田の街「丘の上」に出るときは、ワクワクと心を弾ませるほどの場所であった。

しかし、車社会の到来によって大きく様変わりし、中心市街地から郊外への商業施設の移動、それに伴う商店街の顧客流失、さらに市街地人口の減少、高齢化などで「街」の魅力は半減し、もはや昔の中心性は失われようとしていた。

このような状況の下、飯田市では「中心市街地活性化計画」が検討されてきた。

○飯田市における中心市街地活性化計画

- ・多様化し高度化する消費・文化ニーズに対応した都市サービス機能の充実
- ・暮らしの場としての中心市街地の定住環境整備
- ・歩行者にやさしい交通体系の確立と交通関連施設の整備
- ・地域の個性を活かした優れた都市景観の形成
- ・潤いのある都市環境の形成

そして、昭和から平成に時代が変わる時期にかけて、地元の商店主が中心となって行ってきた活性化の勉強会から市街地再開発事業が生まれてきた。

平成5年には、再開発事業のためのまちづくり会社設立の構想が生まれ、平成10年8月、市民、商店、企業が中心となって出資して株式会社飯田まちづくりカンパニー（TMO）が設立された。その後、

飯田市の出資を受けるなどして市民資本の第3セクターのまちづくり総合支援会社となり、平成11年には、飯田市橋南第一地区市街地再開発事業実施設計策定、飯田市中心市街地活性化基本計画策定と、中心市街地活性化のための事業計画を立ち上げ、事業が実施に移された。

平成13年には最初の再開発事業であるトップヒルズ本町が完成。これに引き続き、トップヒルズ第二、さらに銀座掘端ビルが完成し、計画された一連の再開発事業が完了し、新しい街のかたちと豊かな街の暮らしが創出された。

3. 中心市街地再生への視点

- ①まちづくりの原点に戻り、生活（住宅）と交流（商業・イベント）と仕事（オフィス）等の都市機能を併せ持った、安全で便利で快適な、暮らしよい環境を目指す。
- ②中心市街地全体が一つの共同体であり、公共性を持った市民財産である。
- ③中心市街地の土地、建物の所有と利用に関して、生活者の立場に立った、より合理的な権利関係の調整、マネジメントを行う。
- ④土地、建物の所有者及びそこに生活する人々の利益、つまり商業地、生活地としてのポテンシャルを向上させる。
- ⑤常に住民の合意形成を大切にした市民主導によるまちづくり。

4. まとめ

飯田市の再開発エリアは、JR飯田駅から徒歩15分程度という、若干離れた区域である。当然、駅前においても、再開発の芽はあったとのことであるが、合意形成等において困難な状況から、結果的に理解者が多数を占めた当該エリアにおいて再開発事業が実施されたようである。

完成した再開発ビルと周辺道路の整備により、おしゃれな雰囲気を感じる事ができた。視察日が平日（木曜日）の昼過ぎということであったためか、期待していたほどの人通りがなく、残念ながら賑わいが創出されたのかどうかは確認できなかった。

飯田市は、地理的条件から大都市へは時間的に大変遠く、結果として独立した圏域が形成され、その中心都市としての役割は昔も今も、そして未来も変わらないものと思われる。その意味において、一定の賑わいは続くと思われるが、今後も、何らかの仕掛けを続けなければ、高齢化等の進展により、活力は衰えるのではないかと感じられた。

蒲 郡 市

| | |
|-------|------------------------|
| 市制施行 | 昭和29年4月1日 |
| 人 口 | 81,772 人 |
| 世 帯 数 | 30,778 世帯 |
| | (平成25年12月31日現在) |
| 面 積 | 56.81 k m ² |

愛知県東南部に位置する蒲郡市は、渥美半島と知多半島に囲われ、4つの温泉地を持つ海辺の観光地である。早くから織物・繊維ロープ工業が発展し、現在も繊維ロープ製造業界において日本一の生産量を誇る。また、温暖な気候を活かしたフルーツ栽培が盛んで、ハウスミカンについては日本有数の出荷量である。

観光交流都市づくり

1. 観光を取り巻く状況の変化

蒲郡市では、観光業界のみならず蒲郡全体としての取り組みにより、魅力あるまちづくり・まち育てができないかということで、平成16年に委員会形式による検討を行い「蒲郡観光ビジョン」を策定。観光交流ウィーク、おもてなしコンシェルジュ、新たなマーケットへのPRなど、様々な活動を実践してきた。

しかし、観光施設等の利用者数は平成15年の817万人をピークに減少傾向に、また宿泊客数についても平成17年の101万人をピークに減少傾向を示している。

観光を取り巻く環境変化は著しく、少子高齢化に伴う社会経済の活力低下、アジア地域の経済発展、団体ツアーから個人旅行への移行、若年層の旅行離れ、産業観光・エコツーリズム・ヘルスツーリズム等のニューツーリズムの需要拡大、さらには交通アクセス改善などの社会情勢の変化が、観光産業に対して大きな影響を及ぼしている。

2. 新たな観光ビジョンの策定

このようにめまぐるしく変化する社会情勢に対応するため、「観光ビジョン」策定から5年を経過した平成22年に、新たな「改訂・蒲郡市観光ビジョン」を策定した。

○改訂・蒲郡市観光ビジョンにおける基本目標

- ・訪れてよい町づくり～魅力創造による観光交流人口の拡大
数値目標：毎年の観光客数の維持・拡大を目指す。
観光資源の掘り起こしにより、資源数の増加を目指す。
- ・栄えて潤う町づくり～新・観光産業の振興
数値目標：来訪者の客単価増加を目指し、地域経済への波及効果額を伸ばす。
- ・住んでよい町・帰りたくなる町づくり～蒲郡ファンづくりの推進
数値目標：おもてなしコンシェルジュの増加。
転入者数>転出者数の実現

3. アクションプランの作成と実行

改訂・観光ビジョンの策定を受けて、平成22年度、23年度に行われた取り組みを整理するとともに、24年度以降に実施することが望まれる事業の案と関係主体及び期間についてとりまとめた「蒲郡市観光ビジョン アクションプラン」を作成し、具体的な行動指標を明確に打ち出している。

これは平成24年度から概ね10年後の観光交流立市「蒲郡市」の目指すべき具体的な計画で、その実施時期を明確にするために、短期（3年以内）、中期（4～5年）、長期（6年以上）と実施時期を区分整理したものである。

主な計画は以下のとおりである。

- ①市民と産・官が一体となった“蒲郡の総合力”による新・観光産業の振興
 - ・農業、漁業と観光との連動～ご当地食の提供による地産地消型観光地の創出
 - ・工業事業者の協力による産業観光の推進
 - ・市民、NPO等の市民団体の活動を活かした協働事業の展開
 - ・異業種間、同業種間の交流による観光関連連携事業の展開
 - ・多種多様な地域資源を活かした体験プログラムの充実
- ②E C O H（エコー）T O U R I S Mの推進による新しい「観光都市・蒲郡」のイメージ創出・情報発信
- ③ニューツーリズム（テーマ型観光）の推進による新たな魅力づくりの展開

- ・ヘルスツーリズムの推進
 - ・海、島、山、太陽を活かしたエコツーリズムの推進（自然体験）
 - ・歴史文化、産業観光資源等を活かした体験・学習観光（学校、大人の社会見学）の推進
 - ・海産物、農産物を生かした地産地消型“食”ツアーの推進
 - ・宿泊施設における長期滞在型観光の推進と滞在プログラムの展開
- ④誰もが心地よい“しつらえ・もてなし・ふるまい“のある観光交流都市づくり
- ・域内移動手段、二次交通（域内移動バス、周遊バス等）の充実
 - ・レンタサイクル、レンタサイクルスポットの充実
 - ・おもてなしコンシェルジュによる各種おもてなし活動の展開
 - ・まちかど観光案内所、まちかど休憩所の展開
- ⑤国内外に対し、的確なマーケティングに基づいた観光振興戦略の立案
- ・日帰り観光マーケット（2時間圏内）へのアプローチ
 - ・日帰り及び宿泊マーケット（愛知県内、東海4県、関西・関東・北陸）へのアプローチ
 - ・海外マーケットへのアプローチ
- ⑥広域連携による効果的な観光振興事業の推進
- ・東三河における広域連携
 - ・知多半島から渥美半島にかけての環三河湾広域連携
 - ・名鉄蒲郡線、西尾線沿線連携
 - ・東アジアマーケットを対象とする地域間連携（飛び地連携）
- ⑦持続可能な観光地を目指し、環境にやさしい観光都市を推進
- ・三河湾における環境関連プロジェクトへの参画、あるいは環境活動の実践
 - ・エコツアーの展開、環境関連視察等への対応実施

4. まとめ

蒲郡市は4つの温泉地を抱え、古くから近隣企業の保養地、大規模会議等の会場として賑わいを誇ってきたが、時代の変化とともに観光環境が大きく変貌している。これに危機感を持ち、官民協働で積極的な攻めの観光推進行政を続けており、今後も一定の賑わいは続くであろうと感じられた。